1962年後期オリンピック審査会のうち
総合馬術競技出場馬に関する調査報告

財団法人　日　本　体　育　協　会
東京オリンピック選手強化対策本部
ス　ポ　ー　ツ　科　学　研　究　委　員　会

1962年後期オリンピック審査会のうち総合馬術競技出場馬に関する調査報告

馬術トレーニングドクター
野　村　晋　一

7月に予定された習志野における審査会およびその準備としての講習会が，自衛隊の施設の使用が不可能になったために一時開催を断念せざるをえないかと憂慮されたが，幸い農林省奥羽種畜牧場長の厚意によって，時期的にももっとも恵まれた10月6，7日候補人馬の審査会として行なうことができた。このため9月22日以降10月5日まで現地（青森県上北郡七戸町農林省奥羽種畜牧場）で馬術競技ヘッドコーチによる講習会が行なわれ，予定通りの審査を終了し，次表に掲げた成績にしたがって，総合馬術の第2次候補選手5名，第3次指定馬4頭を決定した。

第1表　総合馬術審査成績

騎手名	馬名	成績
1. 馬場馬術（減点法）		
荒木	アポロ	66.67点
荒木	アバロンジュピター	75.00
佐藤	藤竜	76.34
前田	朝風	77.67
本野	麗燕	78.97
照井	栄天	84.67
木曽	ミッドファーム	85.67
千葉	ミヨシフォード	92.00
木曽	日竜	93.00
照井	捷燕	97.00
2. 持久力（減点法）		
荒木	アポロ	94.8点
荒木	アバロンジュピター	59.2
佐藤	藤竜	55.2
前田	朝風	52.4
照井	栄天	45.6
木曽	ミッドファーム	45.6
本野	麗燕	38.4
3. 障害飛越（減点法）		
本野	栄天	0.0点
佐藤	藤竜	20.0
荒木	アポロ	23.0
荒木	アバロンジュピター	30.0

馬場馬術および余力審査を含めての障害飛越は該牧場の旧放牧用地を利用したが，持久力審査は該牧場用地をフルに利用し，用地内の三浦山の斜面に新しく専用コースを作って，固定障害を設置し，全長27km（オリンピック規定35km）にわたるかなりむづかしいものにした。この審査会において，講習中に2頭の故障馬をだし，また審査会も最初の出場馬10頭が，余力審査には4頭になり，しかも持久力競技中1頭が管骨の複雑骨折を発し，2頭が疲労と関節痛のために跛行するという，あまり香ばしくない成績であったが，わが国でのはじめての経験にしては，まづまづというところであった。持久力競技が人馬ともにひどく消耗するということは，距離の長さ，コースのむづかしさ，走破時間の規定のきびしさなどから考えて当然予想されるところであるが，今回の審査会の課題はむづかしいといっても，オリンピックの規定の7割程度のものであるから，今後余程頑張らないと列強の間に位して恥かしくない成績をあげることはむづかしいと思われる。とくに総合馬術の乗馬は35kmの走破，それも平らな，何もない場所ではなくて，坂あり，濠あり，土手ありといった複雑な地形を走りまわらねばならないのであるから，よほど立派な馬格で，申し分のない内臓器官をもった馬でなければならない。年令にしても7才から10才くらいの馬ざかりのものでなければならない。さかりを過ぎた老令馬や未熟な若令馬はそれだけで，この競技に出場する資格はないのである。

ある意味で，私はこの競技は日本人にもっとも適したものであると考えている。不整地における勇敢な行動といい，細かい神経と機敏な動作といい，われわれ日本人のもっとも得手とするところである。実さい今度の審査会においても，騎手の行動はなかなかよかったし，今後の鍛練で体力も十分涵養できると思われたが，乗馬の貧弱さは如何ともし難かったようである。出場馬の個々については後に述べるが，この競技は技術的にはさほどむづかしくないので，ただ今調教中の乗馬のうちから，馬格のすぐれた，丈夫なものを選抜して，仕上げても間にあうと考えられる。総合馬術にはまず馬が必要であることをとくに強調しておきたい。

調　査　成　績

馬の検査は，出場予定馬の各々について，審査会前日（４日）厩舎内および厩舎裏の広場で，(1)馬体計測，(2)外貌審査，(3)歩様検査，(4)装蹄検査，(5)一般臨時検査および(6)心電図検査をおこない，修正の可能な装蹄上の欠陥は直ちに改装し，異常歩様（跛行をふくむ）を呈するものは原因をしらべて手当させ，輸送や訓練のために一般状態の不良のものは，とりあえず手当をするか，出場を断念させた。競技中とくに持久力競技中は陸上自衛隊の協力によって有線，無線連絡を行ない，人馬の事故を監視し，走破後の管理は厩舎内で綿密に行なった。後述するように持久力競技中１頭が不整地降下の際，骨折し，薬殺のやむなきに到った他，走破後厩舎で起立不能になったもの，球節の疼痛のため跛行を呈したものそれぞれ１頭あった他は，小さな切創，ふみかけ創を作った程度であった。余力審査の開始前は，主として臨床検査と歩様検査によって疲労の状態を判断し，障害飛越の出場馬をきめたが，前述したように，この検査で出場を許したものは４頭だけであった。

第２表はこの審査会の出場予定馬の連名簿である（血統は省略する）

第2表　　総合馬術出場人馬連名簿

騎手名	馬名	種類	年令	性	毛色
荒木	アポロ	アア	9	せん	栗
照井	栄天	アラ系	6	牡	鹿
木曾	ミッドファーム	サラ	12	牡	鹿
朝岡	朝風	ハンター	9	せん	鹿
本野	麗燕	ハンター	8	牝	栃栗
佐藤	藤竜	ハンター	6	せん	鹿
武宮	アバロンジュピター	アア	6	せん	栗
木曾	日宝	アア	7	せん	栗
千葉	ミヨシフォード	ハンター	6	せん	栗
照井	捷燕	サラ	6	牝	鹿
荒木	アバロンカウント	アア	6	せん	鹿
木曾	日竜	アア	5	牡	鹿

出場馬の年令は２年後のオリンピックを考えて，まづ申し分ないところである。12頭の出場予定馬中２頭だけが牝馬である。別に牝馬が牡馬（またはせん馬）に比べて能力がおちるというわけではないが，大障害飛越や不整地騎乗にはやはり牡馬の方がよいようである。物おじしたり，疾走中に急に力がぬけて長もちしない馬は大てい牝馬で，体質的にも，体格的にもいくぶんおちるように思われる。

第３表は出場馬の馬体計測成績であるが，連名簿中アバロンカウントは肩跛行のため出場を断念して休養中であり，日宝は両前肢の球節に圧迫痛を感じ，これまた出場しなかったため計測しなかった。

第3表　　出場馬の馬体計測成績

(cm)

部位	アポロ	栄天	ミッド・ファーム	朝風	麗燕	藤竜	アバロン・ジュピター	ミヨシ・フォード	捷燕	日竜
体高	160	155	164	161	164	158	162	157	168	156
尻高	162	155	160	160	163	160	160	158	165	157
体長	162	156	163	160	157	159	157	155	165	156
胸深	69	68	75	72	76	74	75	71	77	71
胸幅	35	34	38	35	39	44	40	40	39	35
腰幅	52	51	54	50		55	54	55	57	51
尻幅	48	48	49	52		57	50	51	53	49
尻長	52	49	52	54		52	48	50	50	47
胸囲	174	168	184	175	185	186	183	178	187	174
管囲	20.7	19.2	19.7	20.3	20.5	20.2	20.0	18.7	21.5	19.7
備考					後軀にふれることをきらい計測不能					

馬体計測は外貌審査の補助として行なうのであるが，乗馬ではこれらの数値のうち，体高と尻高，体高と体長，胸深と胸幅と胸囲，腰幅と尻幅，尻幅と尻長などの相関々係，および胸囲，管囲などに特に注目しなければならない。馬格はある程度の大いさ以上ないと，総合馬術の規定負担重量の最下限，75kgを負って35kmを走破することができ難い。したがって体高の著しく小さいものや管囲の細いものは好ましくない。

体高は少くとも160cm以上，管囲は20.5cm以上ないと安心できない。計測成績によれば，出場馬10頭中，この条件にかなうものはアポロ，朝風，麗燕，捷燕の4頭くらいであって，この中もっとも管囲の細いミヨシフォード（18.7cm）は前述したように骨折を起している。

成馬では体高がおおむね尻高をわづかに越えるものであるが，逆に尻高の方がいく分高い後高馬もある。乗馬では前肢の負担が過重になるという考え方から後高馬をさけることが多いが，速力をうるのには便利である。しかし不整地の昇降や障害の飛越を考えると，やはり前軀の高いものがよいであろう。

体高と体長をくらべて，前者が大きいものを高方形，両者が等しいものを等方形，逆に後者の大きいものを低方形という。乗馬は高方形か，等方形がよいとされていたが，最近の優秀馬，特に障害飛越に優れたものはかなり体長の長い，大格馬が多くなっている。にわかに結論するわけにはいかないが，野外騎乗に使用する馬はあまり胴が長いと疲労して，弾発力が減耗してしまう。背の短い，腰へのうつり方のしっかりしたものがよいとされているが，出場したほとんど全部の馬が正方形馬または高方形馬で，肢の長いものが多いのは面白い。理想的な野外騎乗用馬といわれるハンターの体型の特徴が，用途の方から求められているようである。

乗馬はあまり広い胸をしていてはいけない。胸囲は大きくなければならぬが，それはむしろ深い胸とくみ合さって大きくなっていることが望ましい。胸深が体高の45%以下というのは，乗馬として失格である。

160cm程度の体高で，72cm以下の胸深では，持久力のある心肺機能を望み難いかもしれない。

腰幅と尻幅，あるいは尻長は均斉がとれていて，大きめでないと，長距離の疾走には間にあわない。馬格全体との場合においてやや大きすぎるが，藤竜の後軀はもっともよく，弾発力の強さを思わせる。腰幅と尻幅の大いさの関係は一面に栄養の良否を表す。過調教，過鍛錬の馬は腰幅が馬鹿に大きく，角ばってくる。もちろん骨盤骨の翼の張ったものはそうなるのであるが，肉づきとあわせてみると，同じ馬については，栄養の良否の変遷をしるのに都合がよい。出場馬中少数頭にそのような過鍛錬の馬があったように思われる。

外貌審査と馬体計測を総合してみて，出場場のうち，アポロ，朝風，麗燕，捷燕等にほぼ総合馬術馬としての条件を満足しているが，栄天，藤竜，ミヨシフォード，日竜等は馬格の上でかなり不足し，ミッドファーム，アバロンジュピターは骨量に乏しく，長距離の疾走に耐えていけるかどうか，また耐えても，故障なしですまされるかどうか心配された。むろん，今回の審査会が万全の準備のもとでなされたのではないから，馬格だけでは結果を云々できないし，また臨床上の不調や好調を加えてみなければいけないのであるが，乗馬としての素質を馬学的にみると以上の結論になる。

さて審査前日の諸検査の概要を各馬について簡単に述べる。

(1) **アポロ**，せん，9才，ア.ア.

栄養はかなり悪い。毛艶がなく，甚だしい巻腹，可視粘膜は淡桃色，耳根，皮膚温に異常はない。心音，呼吸など健常であるが，何となく疲労している様子である。心電図には変った所見はない。

歩様には節度がなく，踏歩に力が入らず，如何にも疲れているような感じがする。蹄温は普通であるが，左前肢内側蹄軟骨がやや硬化している。

この馬は日常かなり強い訓練をうけているので，根性の点では申し分ないのだが，鍛え方が些か強すぎるようである。運動の強度と飼養，管理が平行しないと思われる現在の状態を続ければ早晩消耗してしまうであろう。審査の成績は前述の通り第一位であるが，次の審査までもちこたえうるかどうか疑問に思われる。数少い総合馬術馬なるが故に飼養者の熟慮を切望したい。

(2) **栄天**，牡，6才，アラ系

栄養，一般状態佳良，前述した通り馬格不足のため，高度の課題には耐え難いのではないかと心配されるが，調教の程度もよく，感受性にも富んでおり，まづトップ・コンデションと思われた。臨床検査成績にも何ら異常なく，心電図などにも問題はない。ただし，蹄の管理は不良で，蹄底に枯角が厚くつき，蹄又中溝，側溝ともに深く，腐爛の恐れがある。右前肢内側に管骨痛，管理の不良な焼烙痕がある。疲労時交突負傷の懸念がある。歩様は短節であるが，異常ではない。

(3) **ミッドファーム**，牡，12才，サラ

既述した通り，下負が甚だしく，肢蹄の故障を発しやすいと思われる。事実，臨床検査成績は健常であるが，右前肢掌側上3分の1に局所性の腫張があり，触診によれば腫張部はかなり硬化し，び慢的な骨造成が起っていると思われ，また圧迫によって強い疼痛を感ずるので，出場を止め，レ線診断をうけた上で適当な治療を行なうよう勧告した。また蹄は既に内向し，いわゆる仮性内向蹄の状態をとっているのに，装蹄はこの点を考慮していない。前述の腫張の原因になっているかもしれない。

(4) **朝風**，せん，9才，ハンター

やや下負で，膝，球節に力がないのが欠点である。栄養は佳良であるが，可視粘膜の色が淡く，疲れがみえている。臨床検査，心電図検査成績に特記すべきものはない。

歩様は低運歩で力がなく，踏歩も確実ではない，四肢ともに球節に大きな軟腫があり，左前肢に大骨病，右前肢に小骨病があり，ともにかなり硬化している。歩行には影響がないと思われるが，装蹄方法に注意しないと交突による負傷が懸念される。蹄冠部に微温を感ずるが，これは鉄尾の適合が悪く，哆開していたために誘発されたものと思う。除鉄修正の上，歩様検査を行なった。持久力審査後は疲労が甚だしく，余力審査出場は断念した。

(5) **麗燕**，牝，8才，ハンター

栄養状態良好，やや過肉である。一般状態も良好である。臨床検査成績は普通であるが，心音がやや軟弱である。両前肢ともに球節軟腫があり，しかもかなり強く緊張している。蹄踵，蹄又が広く短く，その上蹄鉄の適合が狭く，鉄尾が短い。蹄鉄の過小による反撞によって球軟を発したとみられる。

持久力検査終了後，厩舎内に横臥し，起立不能となった。検診の結果，種子骨々折が疑われたので，応急処置として，足枷，副木固定を行なった（飼養者より治癒の通知を1ケ月半後にうけとったが，その間の検査は行なっていないので，骨折があったとしても，骨端に小さなひびが入っていた程度だと思われた）

(6) **藤竜**，せん，6才，ハンター

やや過肉と思われるほど栄養は良好である。極めて過敏で，皮膚にふれることさえきらう。一般状態は佳良であるが，心音は不整で，しばしば第二音が聴取しにくい，心電図の検査で明かになったことであるが，期外収縮，P波の脱落，PQ間隔の延長等が混合して現れ，いわゆるWPW症候群といえるものである。WPW症候群の臨床的な意味は現在あまり明確になってないが，何の障害もないとして見逃すわけにはいかないであろう。

肢蹄には格別の欠陥はない。小型の球節軟腫がある他，蹄の管理も良好で，歩様，踏歩は正常である。

(7) **アバロン**，ジュピター，せん，6才，ア．ア．

毛艶悪く，腹は巻き込み，栄養状態は良くない。可視粘膜は淡桃色で，かなり疲労しているようである。心音は第一，第二ともに低く，やや濁している。呼吸は正常である。

歩様には節度がなく，低運歩である。

左前肢の腱鞘がやや肥厚し，跛行は認められないが，過鍛錬，もしくは装蹄の失宜によるつき上げが原因になっているかもしれない。

(8) **日宝**，せん，6才，ハンター

肩跛という診断で休場を申し出ている。跛行診断のみを行なう。

右前肢に軽度の支跛を認む。左，右旋回いづれも右前肢の支持時に歩幅を減少する以外格別の症候なし。

肢上部の筋群に全く異常なく，管部，球節や，腫張し，微熱を感ずる。右球節外側，中骨間筋の種子骨附着部の圧迫により痛みを感ずるらしい。明瞭でないが，球節の圧迫痛として冷湿布を命ずる。

いわゆる結代脉（房室ブロック）を認める。

(9) **ミヨシフォード**，せん，6才，ハンター

前述した通り，馬格に不足し，未完成の様子，栄養は佳良であるが，疲労が残っているように思われる。第二音が強烈で，呼吸や，促進，耳根，球節等に微温を感ずる。

心電図に異常を認めないが，T波がかなり増高している。荒地騎乗ではとくに馬を追い込まぬよう，大事をとらせた。

本馬は持久力競技中第26障害通過後，左前肢管骨を複雑骨折し，抱クロ麻酔，馬車輸送後，薬殺した。

(10) **燕捷**，牝，6才，サラ

一般状態は普通であるが，皮温やや高く，耳根，球節，蹄に微温を感ずる。膿様の鼻汁を認める。輸送の疲労が完全にぬけていないようである。心音は清澄，呼吸は正常である。心電図は正常。

四肢ともに球節軟腫を有する。蹄鉄の適合はいづれも狭く，鉄尾過短，右前蹄に踏みかけ傷がある。装蹄の失宜によるものと思われる。

競技前日の検診に以上の通りで，この中日宝，捷燕は休場し，ミヨシフォードは事故のため番外となり，前述の成績をえたのであるが，端的にいって本競技会出場馬のうちから，オリンピック出場候補馬を選抜することは容易でないと思われた。